
ファンタジーワールドへようこそ

06

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーワールドへようこそ

【Nコード】

N3884Q

【作者名】

06

【あらすじ】

ある日、家でいつも通り寝たはずだった雅だったが、気が付けばそこは見たこともない世界だった。

途方に暮れる雅の前に現れた「ファン」によって、ここがファンタジーワールドという世界だということを知らされる。

雅の運命やいかに！？

第一話 夢、招待、救世主。（前書き）

「僕の日々」と同時制作で行きたいと思います。
応援よろしく願います。

第一話 夢、招待、救世主。

俺は目を覚ました。

「ううん……えつと、ここは……？」

まず最初に目に飛び込んで来たのは、ペンキで塗ったように水色な空だ。所々に白い雲が浮かんでいる。

あたりを見回して首を傾げる。

「どこだ、ここ？」

すると、不意にどこからか声が響いてきた。

『ようこそおいで下さいました。ここは、あらゆるファンタジーの世界の集合体、名付けてファンタジーワールド！ この世界では、家を建てるもよし、結婚するもよし、悪魔王と戦うもよし、とにかく何でも有りなのです！』

「だ、誰だ！」

『これは失礼しました。私、わたくし貴方様の案内役を仰せ付けられました、ファンと申します。この世界で困ったことがあれば、何でもお申し付け下さい』

「は、初めまして……」

と礼をしようとした雅だったが、一体どこに礼をしたら良いのか分からないことに気が付いた。

「そういえば貴方はどこから喋っているんですか？」

すると、一人の女性が雅の目の前に姿を現した。

「うわ！」

「では、貴方様にもこの世界について説明いたしましょう」

「え？ いや、ちょっと……うわっ！」

体が宙に浮いたかと思うと、そのまま空高く飛び上がった。しかし、ある程度上がったところで、体の上昇は止まった。

「まずはこの世界の種族についてご説明致します。種族には、それぞれが色んな特性を持っていて、全部で四つほど種類があります」

「たとえばどんなのがあるんですか？」

「分かりました。ご説明致しますよう。下を見て下さい」

恐る恐る下を見ると、そこには綺麗な街が広がっていた。

「あ！ 人だ！ 人がいる！」

「はい。人間族はこの世界に住む住人の大半を占めていて、現実のような生活を送っています。さらに、才能がある方は魔術や回復術なども使うことが出来ます。この種族を一言で言うなら、バランスの取れた一般人といったところででしょうか」

「つまり、普通……」

「そういうことになりますね。続いて獣人族」

ファンは店の前で腕組みをしている大男を指差した。

「獣人族は他の種族と比べて非常に力が強く、とても野生的な種族です。そして、その多くは王国の軍隊に所属しています」

「王国って何ですか？」

「失礼。王国とは、その昔、悪魔王が他の種族の集落を襲い、この世界が滅びそうになった時、それを何とか防ごうと三種族の長が協力あつて作り上げた国のことです」

「なるほど。つまり、その王国内では全ての種族が平等ということですね？」

「はい、そうです。ちなみに、王都の周りには強固な城壁があり、悪魔族は入ってこれないようになっていますのでご安心を」

「そうなんですか。ところで悪魔族って一体……」

「悪魔族とは四種族の内の一つでございまして、悪魔王率いる極悪非道な種族でございます。他の種族を襲い、その領地や命を奪ったりに暮らす種族です。王国軍が成立した今では時と共に沈静化しつつありますが、いまだに悪魔王の力は絶大で、王国も手を妬いております。貴方をこちらの世界にお呼び致したのもそれと関係があるのですが、それはまたの機会にご説明致します」

「……分かりました」

「では、最後の種族になります。最後にご説明致しますのは、悪魔

族と真反対にあたる種族。天魔族です。こちら悪魔族と同様、魔王という絶対的な魔力を持った長がいることにはいるのですが、悪魔族に比べて元々数が少なく、さらに、悪魔王の襲撃のせいでさらにその数は半分にも減ってしまい、今となっては百人もいません。しかし、王国が出来たことにより、何とか滅亡だけは免れました」

「たったの百人……」

「かく言う私めも、その天魔族の一人として、こうして悪魔王討伐の人員を請っております」

「つてことは、僕が呼ばれたのつて……」

『そういうことになります』

「そうですか……つて、ちゃんと元の世界には戻れるんですね！？」

「もちろんです。貴方様は夢からこの世界に接続リンクしているだけなので、お目覚めになりたい時には簡単に元に戻れます。また、向こうの世界でこの転送章を使えばいつでもこっちの世界にこれますよ。では、これをどうぞ」

そう言つて、ファンは一枚の布きれを差し出してきた。しかし、それを受け取った瞬間、その表面に描かれていた文様が浮かび上がり、左の手の甲に焼き付いた。

「うわ！ 何だこれ！？ 取れない！」

「こちらの世界ではそのように目立ってしまいますが、向こうの世界では他人には見えないようになっておりますので、ご心配なく。それに、こちらの世界では、その文様を見せれば割とわがままが通つたりしますよ？」

文様を擦っていた手を止め、ファンを見る。

「え？」

『貴方様はこちらの世界では一応救世主ですから』

「ええ！？ きゅ、救世主！？」

「はい。しかし、今このことを説明しても貴方様にはご理解頂けな

いでしょう。ですので、またの機会ということで」

「はい……」

「ところで、貴方様は先ほどから私に敬語を使っているらしいですが、私は貴方様の僕でしもへございます故、私めのことはどうかファンとお呼び下さい」

「え？ でも……」

「私は貴方様をご主人様とお呼び致しますよう」

「そ、そんなの止めて下さい」

「お気に召しませんでしたか。では、雅様、ではどうでしょう？」

「……はい。分かりました。それで良いです」

「そうですね。では、雅様の番です。」

「……ファン」

すると、ファンはにっこりと微笑み、

「はい。何でしょうか、雅様？」

と言った。

「な、何でもない」

「分かりました。では、他に知りたいことはありますか？」

「いや、もういいよ」

「そうですね。……おや？ そろそろ雅様の世界で朝が来るようですね。では、最後に、こちらへの接続の仕方を説明致します。まずは、その転送章に右手を翳して下さい。そして、こっちの世界のことをイメージしながら、心の中で「接続リンク」と唱えて下さい。それでは、またお会いしましょう——」

「……し……だし………雅……！」

俺は母親の声で目を覚ました。

「今何時だと思ってるの！？ 早く朝ご飯食べないと学校に遅れるわよ！？」

「あ……。お早う母さん……」

「何言ってるの？ もう『遅よう』よ……！」

「ああ、もう七時か……」

そう言って目を擦ろうとして俺は凍り付いた。

「夢じゃ……無かったんだ……」

見つめる視線のその先にあるのは、夢の中でファンに貰った救世主の証。

——つまり、転送章だった。

第一話 夢、招待、救世主。（後書き）

修正情報

3 / 1 3 視点を第三者からキャラ視点に変更。

3 / 1 3 全体的に微修正。

3 / 1 3 サブタイトル変更。

第二話 友情、テスト、愛情。

テスト後という事もあり、教室は賑やかだ。そんな中、俺は何をしているかというと、ただ一人教室の隅っこの方にある自分の机に突っ伏してダウンしている。

「おい。雅ー。サッカー行こうぜー！」

俺の数少ない友達の一入である、優司が遊びに誘おうと呼びかけてきた。俺はそのままの姿勢で片手を挙げる。

「悪い。俺パス」

すると、優司は近くまで歩み寄ってきた。

「どうしたんだよ。お前にしてはノリが悪いじゃんか」

「今の俺には睡眠が必要なんだ」

「具合でも悪いのか？」

優司が心配そうに覗き込む。

「いや、そういう訳では無いんだが……」

「ふーん。まあ、お大事にな」

それだけ言い残すと手を振りながら優司は教室を出ていった。

「ふう……。人気者の相手は疲れるぜ……」

廊下からの女子の視線が痛い。

おっと、下手なこと言つと袋叩きだからな。怖い怖い……。

雅は再び机に突っ伏すと、そのまま寝息を立て始めた。

「……て……てよ……起きてつてば！」

雅が目を開けると、今年からの新任教師である、帝紀子^{みかどのりこ}が涙目で立っていた。

「はっ！ ああ、帝先生。お早うございます」

「お早うじゃないわよ。私の授業の間ずっと寝てるつもりだったの？」

「いえ、そんなつもりは……あ」

確かに、授業もあと10分程度だ。

「先生つてばさっきまでお前をさりげなく起こそうと必死だったんだぜ！」

隣の席の、さして仲も良くない男子が放ったその言葉に、先生は赤面した。

それを見てクラスは騒ぎ始めた。あつけに取られている間に、その騒ぎ方は尋常じゃなくなり、先生はいよいよ泣きそうになる。ということとは、そろそろ……。

「おい。うるさいぞ、お前ら」
ほらきた。

いつも通り、優司の落ち着き払った声が一瞬で教室を静める。そして、そのまま騒ぎは収まる。

「なんだと？ お前、ちよっとモテてるからって調子に乗ってんじやねえぞ！」

……はずなんだけど。あれ？

さっきの男子が優司の襟を掴んだ。が、しかし、優司はその手を掴んでひねり上げ、またも一瞬で、男子の動きを封じた。

「ぐっ……優等生が……」

苦し紛れに言った一言も、その体勢では威力が無い。

優司がふと先生に視線を投げる。それによって金縛りが解け、先生はやっと、

「代田君も騒がないで。沖君、ありがとう。だけど力ずくは良くないわ」

と言った。

「はい。すみません。身の危険を感じたので、小さい頃習った護身術がつい、出てしまいました」

優司のその言葉に、教室の女子が沸いた。正直言つて、さっきの男子よりも凄くうるさい。

「先生、雅も起きたことですし、授業を続けましょう」

「そうね。根夢君も起きたことですし、ね」

『キーンコーンカーンコーン』

「あら、根夢君のせいでもうこんな時間ね。じゃあ、今日はここまで。各自予習を怠らないことー!」

「起立、気を付け、礼」

……………。

「…………俺のせい…………か?」

「雅ってさ、いつも寝てるよな!」

優司が雅に肩を回しながら言った。

「そうか? 起きてるときは起きてるけど」

「いや、授業中の話だよ。今日もだけど、午後からはほとんど寝てんじゃない?」

「んゝ、そっぴやそうかもな…………」

雅がそう答えると、優司はいきなりキレてこう言った。

「じゃあ、なんで俺より点が高いんだよ!」

今、雅達がいるのは校長室前の掲示板の前。そこに先週行われたテストの順位が張り出されている。

「さあ?」

雅は優司を馬鹿にしたように両手を肩の辺りに広げた。

勉強。それが雅が優司に勝てる唯一の才能である。

雅は悔しがる優司を後目に順位表へと視線を戻した。

今回の雅の順位は二位。

「やった…………」

雅は呟いて、自分の名前の一段上を見つめた。

そこには今まで一度も超えたことのない人物の名前が記されている。その人の名は斎藤まどか。

1年の頃、雅は学力がずば抜けてトップだったまどかに一目惚れをした。その時、勇気を振り絞って声を掛けた俺に、まどかは一言、「馬鹿には興味ないの。話しかけないで」

といい、関心を持ってくれなかった。しかし、俺はその時のまど

かの姿勢に憧れ、強く魅せられた。

それ以降、俺は彼女を超えることだけを目標として学校に通った。そして今日、初めて彼女の後ろについた。嬉しさと悔しさが混じった感情が心に溢れる。

トップ、つまりまどかとの点差はわずかに2点。たった一問の差だ。

「よし、これなら行ける」

全く手が届かなかった彼女にやっと……。

「悪いな13位、俺には用があるから先に行かせてもらおう。それじゃ！」

雅は優司に向かってそう言うと、

「バレるだろうがー!!」

という優司の声を振り切って教室へ急いだ。

『ガタタンッ!』

「まどかちゃん!」

その声を聞いて、私は大きく溜息をついた。

あの馬鹿が、性懲りもせずまた来たのかしら……。

わざとしかめっ面を作ってから、振り向く。

「何かしら。馬鹿の話は聞きたくないとあれほど……」

「二点差!」

「え?」

「俺二位だよ! だからもう馬鹿じゃないんだよ!」

「……二点差……ふふっ」

突然、笑いが込み上げてきて、久々に笑った。馬鹿……いえ、そろそろ名前と呼んでも良いかしら。でも、残念。私としたことが、この人の名前を知らないわ。

「驚いたわ。十位以内にすら入っていなかった貴方が私に追い付くなんて。本当に」

私がそう言うと、彼は不意に私の手を取った。

「だろ？ だからさ、俺と付き合ってくれよ」

「え？」

一瞬、頭の中が真っ白になる。でも、次の瞬間にはその意味を理解し、私は首を横に振った。

「駄目よ。いくら追い付いても二位は二位。私を超えない限り私の恋愛対象にはならないわ」

それに、私と付き合っても、貴方はきつと退屈してしまうもの。

「じゃあ、次のテストで俺がまどちゃんを抜いたら、付き合ってくれるんだね？」

え？

「いや、そうは言ってな……」

「よし、こうしちゃられない！ 勉強頑張らなくちゃ！」

そう言うなり、彼は教室を勢いよく出て行った。

「……………え？」

取り残された私は、どうすれば良いのだろうか？

「母さん、ただいま！」

雅が帰ってきたのね。ずいぶんとご機嫌なようだけど。

「あら、お帰りなさい。何か良いことでもあったの？」

「はい、テスト結果。ハンコよろしく！」

雅が返事もせずに結果表を突きつけてきた。結果を聞こうと口を開いたものの、そこにはもう、雅の姿は無かった。

あの様子だと、相当悪かったようね。

深呼吸を一つして、結果表を開く。

「平均98点……。あの子が？」

名前を確認する。でも、そこにはきちんと雅の名前が書いてあった。

「夢みたい……そうよ、夢よ。きつと夢なんだわ！」

「何ぶつぶつ言っただよ母さん」

振り返ると、雅が心底哀れむような目でこっちを見ていた。

「あら、雅。ちょっと話があるからここに座りなさい」

名前間違いでないのだとしたら、もう、アレしかないわね……。

はあ……。悲しいわ。

「雅」

「何？」

自然に涙が溢れ出してきた。

雅はまだ、私にばれていないと思っているのか、満面の笑みでこっちを見ている。

大きく息を吸い込み、一気にまくし立てる。

「お前をカンニングするような子に育てた覚えはありません！」

「え？ ……って、してねーよ！！」

その日、私は夕飯に雅の好物の海老フライを出した。

第二話 友情、テスト、愛情（後書き）

修正情報

3 / 1 3 視点を第三者からキャラ視点に変更。

3 / 1 3 全体的に微修正。

第三話 クエスト、猛火、勝利。

「……っと、ファンタジーワールドに来てみたりして」

雅は綺麗に着地を決めると、そう呟いた。

「さて、まずは呼んでみるか。……『ファン』！」

すると、雅の目の前にファンが現れた。

「はい。お待たせしました、雅様」

「あのさ、これから俺は何をすれば良いんだ？」

雅がそう聞くと、ファンはビシッと草むら差してこう言った。

「ああ！ あんな所に魔物が！？」

雅はファンの指差した方を見た。

「……何も居ないじゃないか」

「え！？ そんなはずは……」

ファンは草むらの所に飛んで行くと、それに向かって何か言った。すると、その草むらから雅の膝くらいのネズミが現れた。

「ほ、ほら、居ましたでしょう？」

「『魔物』ではない気がするけど……」

「何を言いますか！ 彼こそ魔物の中の魔物です！ 彼を倒せば貴方はきつとレベルアップできますよ？」

「あ、やっぱりレベルとかあるんだ？」

「ありますとも！ さあ、魔物を倒して下さい！」

そう言つと、ファンは雅に小ぶりの剣を手渡した。

「分かったよ……倒せば良いんだろ？」

雅は洪々といった様子で剣を構えた。すると、目の前のネズミはビクッと体を強張らせ、何かをぶつぶつと唱え始めた。

「何だ！？ 魔法か？」

雅は耳を済ませた。すると、ネズミの言っていることが次第に聞き取れてきた。

「……のため……家族のため……僕一人で家族が助かるんだ……」

「……………おい、ファン。話がある。ちょっと来い」
すると、ファンは冷や汗をたらたら流しながら雅に近付いた。
「はい、何でしょう……………」
「あいつは本当に魔物なんだよな？」
「魔物と言つか……………その……………」
「生活に行き詰まった大家族のお父さんネズミじゃないだろうな？」
ファンはハツとして言った。
「何故それを!？」
「倒せるか!！」
「ああ……………。すみません。手頃な魔物が見つからなくて……………つい」
「『つい』じゃねえ！」
「あ、でも、貴方の心の魔物は倒せたみたいですよ？」
「何が上手いのかすら分からねえよ!！」
「テロレロリン!」
「何だよ。今度は」
「雅はレベルが上がった!」
「上がるか!」
「正義感が1上がった」
「おかげ様でな!」
「……………分かりました。雅様、私を倒して下さい!」
「何を急に言い出すかと思えば……………」
「フフフ……………。雅様、私は結構強いですよ?」
「レベルは?」
「2です」
「同レベルかよ!」
「雅様、覚悟!」
「くっそ、やるっきゃねー!！」
『ガキン!』
「グハッ!」
ファンは倒れた。そして、フツと笑った。

「雅様、私を倒すとは中々やりますね」

「同レベだけどな」

「雅様、私の亡骸の上を超えて……って、痛い痛い！ 本当に踏まないでくださ……ギャー！！」

「大丈夫か？ ファン。手加減したつもりなんだけど」

「大丈夫だ。問題な……グハッ！ ちょっと……ガッ……喋らせ……カハッ……」

「返事がない。ただの屍のようだ」

すると、ファンは再び蹴ろうとした雅の足をガシッと掴んだ。

「本当に屍にするつもりですか！」

「もちろんさ」

「いや、そんな。ド・ルドっばく言われても、読者の皆さんには伝わりませんよ」

雅は剣の柄を握りなおした。

「お前は死んで、子ネズミたちの餌となる！」

「待って下さい！」

その声に雅はファンの喉元すれすれで剣を止めた。

「待って下さい。僕はこう見えて立派な魔物です。勝負しましょう、雅さん！」

振り向くと、ローブを着たネズミがそこに立っていた。

「喰らえ！ ファイア！」

ネズミの小さな手からその体に似合わない、大きな炎が雅たちに向かって飛んできた。

「不意打ちなんて汚ねえぞ！」

雅は横に飛び出してそれを避けた。が、しかし、ファンは回避が間に合わず、マンガのように黒焦げになった。

「ぐ……すまねえ、ファン。お前の死は無駄にしない！」

雅は剣を構えてネズミに突進した。

「ウオオオ！ 喰らえ！」

渾身の力で振り下ろした剣はいとも容易く避けられてしまった。

「まだまだ！」

雅は右へ左へと飛び跳ねるネズミに向かって何度も斬りつけた。しかし、速過ぎて当たらない。

「行きますよ！ 雅さん！」

ネズミは雅から距離を取ると、再び両手を胸の前に突き出した。

「ファイア！」

（さっきよりデカイ！？）

さっきの倍ほどの大きさの炎が雅に迫る。

「クッソー！！」

叫ぶなり、雅は見よう見まねで両手を前に突き出した。止めるつもりなのだ。

「ウオオオオオー！！」

炎が雅の手の数センチ前で止まった。しかし、雅はその重みに耐え切れず、ジリジリと後退していく。このままではやられてしまう。

「グ……。まだまだあー！ 喰っらえー！」

ネズミは調子に乗って炎を撃ち続ける。

「お、重い……」

とその時、後退していた雅の脚に何かが当たった。

（ん？ こ、これは！？ ……よし、いける！）

「オラオラー！ どうしたー！ 家庭を支えるお父さんなめんじやねーぞ！」

ネズミは尚も攻撃を続けていた。

「でも、ちよつと疲れてきたな……。よし、そろそろ止めにすつかー！！」

ネズミは両手を頭の上に伸ばした。

「ウオオオオオー！」

その声に合わせて、ネズミの上に巨大な火の玉が形作られていく。
「超特大！ ファ・イ・アー！！」

ネズミから放たれた巨大な火の玉は炎の中に突っ込んでいくと、

大きく爆発した。

「フウ……。手応えアリだぜ……。さーつてと、報酬報酬……」

と、満面の笑みで振り向いたネズミは何かにぶつかってよろめいた。

「つてーな……。何すんだ！ つて……。え？」

見上げたその視線の先に居たのは雅だった。

「よう。久しぶりだな？」

雅はにつこりと笑ってネズミに一步近付いた。それを見てネズミは思わず後ずさる。

「くっそ……。このやろー！」

ネズミは火炎を出そうと構えを取った。

「ファイア！」

ネズミの残りの力を振り絞って出した炎が雅を包み込む。

「やった！」

が、しかし、雅はその炎を一瞬でなぎ払うと、ネズミに剣を向けた。

「覚悟しろ」

「そ、そんな……。何で、何でアレを喰らって平気なんだよー！？」

「平気じゃないさ」

「え？」

すると、雅は先程の爆発の後を指で差した。

「……。あ、あれは！？」

「そう、お前のあの攻撃を喰らったのは俺じゃない！ ファンだ！
！」

（なんて奴だー！）

「あの時、俺は足元に転がっていたファンを身代わりにしたんだ。
正直、初めて役に立ったぜ。あいつ」

そして、雅はネズミを見据え、言った。

「利用できるものは利用する。それが俺の、勇者道だ！」

（そんな勇者いらねー！！）

「さあ、俺に土下座しろ。そうすれば命は助けてやる」

ネズミは渋々地面に頭を付けた。

「よし、良いだろう。それじゃあ、体を大事にな」

そう言つと、雅はファンの元へと駆けた。

「おい、ファン。本当に死んじまったのか？」

雅の呼びかけにファンは答えない。しかし、明らかに意識はある。

「……おい。もしかして怒ってるのか？」

「……」

「スカートめくれてっぞ」

「見るな変態！」

ファンが跳ね起きざまに放った蹴りを雅は敢えて避けなかった。
雅が吹っ飛ぶ。

「……ハッ！？ 私は何てことを…… 大丈夫ですか、雅様！」

「大丈夫だ。問題な……」

笑いながら立ち上がった雅は、思わぬ激痛に顔を歪めた。

「全然大丈夫ではないじゃないですか！？」

「いや、君に比べればこれくらい…… なんてことないだろう？」

「そんな……」

「さっきは悪かった。君をあんなことに使つつもりは…… ちょっと
しかなかった」

「ちよつとはあつたんですね」

「ははは…… って痛てて……」

「待つて下さい」

「え？ 何？」

ファンは雅の腹部に手を当てた。

「ヒール！」

すると、ファンの手から雅に向けて光が注がれ始めた。

「す、すげえ……。痛みが退いていく……」

やがて、ファンは雅から手を放すと、大きく息をついた。

「これで良いでしょう。まだ痛みますか？」

「いや、もうすっかり治ったよ。っていうか、凄いなそれ。どうやるんだよ？」

「貴方にはまだ早いです」

「同レベのくせに」

「……」

「……」

「アッハッハ……」

その二人の声は平原に響き渡っていった。

「ん……。もう朝か……」

雅はベッドから身体を起こすと、ストレッチを始めた。

（そう言えば、ファンって何者なんだろう？）

とか考えながら。

やがて、ストレッチを終えた雅は手早く着替えると、自分の部屋のドアを開けた。

強制終了に関してのお詫び。

誠に申し訳ありませんが、この作品は打ち切りとなりました。

今回、作者こと06は、小説の作成方針を大幅に変えることにしました。

別に書き続けても良いじゃないかと、思われる方もいらっしゃると思います。

お察しの通り、僕の脳の容量は、大変小さいのです。よって、掛け持ちできる物語数が当然限られます。

後はまあ、気持ちの問題ですね。

「新装開店！」

って感じで再開したいもんで。

今までこの作品を応援してくださった方、通りすがって下さった方に感謝して、これから二週間ばかり、活動を休止したいと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884q/>

ファンタジーワールドへようこそ

2011年3月21日14時10分発行